濃毎日新聞社）によると、大正十三年開業の年には本校にゆかりの深い今泉雄作が瀬川独活王を連れて訪れ、水墨画を遺した。昭和二年飯田線開通とともに東京から文人も多く訪れるようになり、その宿帖（原彰一氏蔵）には中村不折、池上秀畝、石井柏亭、頭山満、三木清、東畑精一その他著名人の名が記されている。本校関係者では昭和十年に結城素明が訪れて竜角峯の画を遺し、同十五年に川合玉堂が訪れてむささびの宿と命名し、翌十六年には香取秀真および北原大輔、三佳兄弟が訪れている。旅館の主人原悌蔵は美術愛好家で、旅館の経営は姉に任せて自分は東京牛込に美術、工芸関係の事務所を設け、昭和十年天竜峡美術協会を作り、作家たちと交流した。特に中村不折と親しく、太平洋画会のメンバーを宣伝を兼ねて仙峡閣に無料で泊めるなどした。彼は昭和十四年には高島屋美術部と共同して東都大家日本画洋画彫刻展を開き、以来作家たちとの交流が深まるとともに新たな計画が芽生えた。

昭和二十二年十月十八日、上野直昭と脇本楽之軒は飯田の菱田春草三十七回忌列席を終えて原の勧めにより仙峡閣を訪れ、三日間逗留した。そこで原は天竜峡に美術館を作り、本校の分校を付設する計画を提案した。天竜峡の川路公園の松林の中に戦時中豊川海軍工廠の疎開工場となっていた建物が数棟散在して放置されていたので、それを分校の校舎にしようというのであった。上野らは高山宿舎（当時はすでに継続困難の事態が生じていたのであろう）の例もあることから、計画に乗り気になり、帰京後文部省との交渉に着手した。このことは上野の日記にも記されている。その際、上野が原に提出を求めた天竜峡美術館趣意書と上野の手紙が現存（同じく原氏蔵）しており、それには美術館建設費として五一〇万円、本校分校（百坪）建設費として百万円、その他二七五万円が計上されている。

しかし、文部省との交渉は成功せず、原の事業も破綻し、分校設立計画は立ち消えとなった（本項については原彰一、市瀬幸助、飯田市文化会館滝沢正幸の各氏に資料提供等ご協力を頂いた）。

### ㉓ 鶴ケ島農場

戦後の食料難対策として本校も他校に倣って農場を開設し、次の耕作者募集を行なった。

昭和廿二年五月二十一日

東京美術學校生徒課長

殿

一、鶴ヶ島農場耕作に関する件

過般文部省は學徒自活の一助と勤勞教育擴充の目的を以て埼玉縣鶴ヶ島に農場二十町歩を創設し希望學校に分割貸與されることになりましたので、本校では右農場一町歩を借り受けました。就きましては耕作御希望の有無を五月三十一日（土）迄別紙要項により御回答を下さる様御願ひ致します。

一、場所　埼玉縣入間郡鶴ヶ島（東上線池袋より寄居行、坂戸駅下車）

一、常住の管理者（石井）が居ます。

一、宿舎及農具の設備あり。

〔下略〕

昭和廿二年五月二十三日　東京美術學校生徒課長

生徒課殿

鶴ヶ島農場宿泊等に関し左の通り御知らせ致します。

左記

一、配給粉等一日分持参すればそれを米に取替へ其他加配米一合五勺を加へ、副食を賄ひ一日金貳円也

一、寝具等の設備あり（宿泊料は無料）

これに対して次の応募があったことが記録されている。

○責任者　脇本十九郎（一段）

耕作者　文庫課（脇本十九郎、前田泰次、後藤年彦、上原之節、望月清、久松家徳、生田目弥寿、高橋和子、佐藤八重子、足立君子、黒田淑子）

○責任者　後藤年彦（一段）

耕作者　工芸科彫金部（梨本茂、海老沢啓、大伴貞雄、岩倉康二、宮下三四郎、宮口寿夫、池公、菱田安彦、千野敏夫、内野二郎、中島広、長谷川恵一、堤圭一、金丸峯雄、後藤岱二郎、遠山元則、宮坂富美子、長谷川栄、高橋菊光、平松保城、鈴木友弥、木村賢太郎、小川仁一、鈴木栄子）

○責任者　松田義之、日下喜一郎、川合清（二段）

耕作者　師範科（松田義之、日下喜一郎、川合清、予科板谷房吉外十六名、一年安斎徳衛外十七名、二年浜田一夫外二十五名、三年桜井慶治外二十五名、四年大沢寛）

（以上「昭和二十二年　農場　生徒課」による。）